

書 評

松村昌家著
『幕末維新使節団のイギリス往還記
ヴィクトリアン・インパクト』
(柏書房、2008年)

重富 公生

じつに楽しい読み物である。「楽しい」という形容詞がいささか特性を欠くとすれば、こう言い換えてもよからう。著者は、イギリスを訪問した二次にわたる使節団の同行員たちの複数の観察記を縦横に読みこなし、それを素材としてヴィクトリア朝なかばのイギリス社会と景観を著者流に見事に描ききっているだけでなく、その作業自体を存分に楽しんでいる風情を読者にいささかも隠そうとしていない、と。遣欧使節団やそれにかかわる記録の歴史研究について評者(重富)は門外漢であり、そういった面での本書の評価は専門家に委ねたい。しかし本書はイギリス研究者の立場から書かれた使節団のイギリス観察録として、そして読み物として優れた内容を有しているばかりでなく、随所で指摘された観察記の著者たちの誤解や事実認識の誤りも含め、貴重な成果として使節団研究の「青史」に加えられるべきものと確信しうる。

本書は前編「1862年の遣欧使節団」と後編「岩倉使節団のイギリス回覧」の二編から成る。ここで内容の概略を順に紹介することは、しかしながら、本書の性質上そぐわないであろうし、未読の諸氏の楽しみを残しておくためにも(その楽しみをこれから味わえる人を心底うらやましいと思う)できるかぎり控えたい。1862年の使節団の編では、団員の残した複数の観察記を中心にその足取りが辿られるが、最も頻繁に参照・引用されているのは、ほぼ全行程にわたって使節団に同行したジョン・マクドナルド(駐日公使オールコックの通訳兼一等補佐官)の使節団同行記である。そのためもあってか、前編は後編よりもいっそう、イギリス人の見た使節団観察記という趣が濃い。

まず江戸からロンドンまでの旅程と、行李を解く間もなく臨席した第二回ロンドン万国博覧会見物の模様が描かれ、冒頭から読者はすっかり引き込まれる。約三ヶ月に及んだ往路の長旅の描出はそれ自体興味深いものであるが、使節団員たちの視点や関心の違いが、それぞれの観察期の記述を通じて徐々に明らかにされていく。それにしても、途中立ち寄った香港、シンガポール、セイロン、アデン、カイロ、アレキサンドリア、マルタ島といった地域がすべて「大英帝国の一部をなし、あるいはその支配下におかれようとしていた」（32頁）ことに改めて思いを致さざるをえない。1862年ロンドン万博見物記は、内容的に本書の白眉ともいえる部分のひとつであるだけでなく、1851年ロンドン万博に比べると注目度が遥かに低いこの催しの概要を知ることができる貴重な章でもある。さきの万博ではごく軽微な扱いにすぎなかった美術部門が1862年には「ピクチャーズ・ギャラリー」として中心的展示のひとつとなったが、そのことの経緯や意義も指摘されている（残念ながらこの部門は使節団員の興味をそそることはなかったようだが）、また会場での見物「対象」としての使節団について、『パンチ』誌に掲載された風刺的叙述の引用（64-65頁）は、思わずニヤリとさせられる。

前編では、使節団による兵器工場や炭坑等の見学の様子も描かれるが、わけも福沢諭吉のロンドン観察記の第5章は興味深い（福沢は5月の中旬に離英して再びヨーロッパ大陸に向かったため、別章で取り上げられたイングランド北中部の視察には同行していない）、それぞれの団員による記録を読みほぐしていく著者の手際は見事だが、うち福沢による『西航記』の記録に焦点を当てたのが本章である。市内の種々のインフラ施設や病院、電信局にかんする福沢の具体的かつ本質洞察的でありながらもいささか無感動で簡便にすぎない叙述を、著者は豊かな事実をもって肉付けしている。

後編の「岩倉使節団のイギリス回覧」は、久米邦武の筆になる包括的・体系的記録としての『特命全權大使米欧回覧実記』（以下、『実記』）の存在もあり、使節団のイギリス国内での足取りが、ほぼ実際の移動スケジュールに沿っていっそう詳細に辿られている。今次の使節団のイギリス滞在はほぼ百日の長きに及んだが、まずは連日早朝から深更におよぶ使節団の移動と視察日程の過密ぶり、そして見聞するものすべてに注がれる彼らの眼差しに持続するエネルギーに圧倒される。二つの使節団の間に横たわる十年という歳月の

重みについては、前編最終章の「開市・開港延期から岩倉使節団までの十年」および後編最終章の「稔励風ヲナシタル国」で論じられている。1862年の使節団にとってはるか彼方に存在する文明の精華であったり理解不能の異風であったりした文物が、明治維新をはさんだ岩倉使節団員の目には、実現可能性に彩られた可視的な未来として映ったというべきか。

そのような「未来」を指し示す場所として、今次の訪問のひとつの眼目となったのが第三章「コットノポリス：マンチェスター」であろう。すでに幕末にはイギリスから紡績機が導入され日本でも機械式紡績業が緒に就いたばかりであった。この章では久米による紡績工場の詳細な観察記の引用を織り交ぜながら、マンチェスター綿工業の繁栄、それに伴う環境悪化や労働問題が「他人事」としてではなく描かれている。またそれとはやや別の観点から使節団の大きな興味を引いたのは、幕末から維新の動乱においてその商品がすでに大きな「役割」を果たしていたアームストロング兵器会社の視察であろう（第六章）。

後編では、1862年使節団とは異なり、工場や都市インフラ以外に離宮や城、貴族のカントリーハウスなどの文化遺産的スポットへの来訪や、スコットランドのハイランド地方のような「山水ノ勝二名アル地」の旅が綴られる。黒い煤煙におおわれた工業都市とはまったくことなる環境で、使節団の一行が天然の景観を賞味し心から寛いでいる様子は『実記』の流麗で陰影に富む文章から窺うことができるし、それは著者の適切な脚色と語り口により後編を読む読者にも心地よい安らぎの一齣として伝わってくる。さらに後編最終章では、『実記』の第二十一巻「英吉利国総説」や第二十二巻「倫敦府総説」からの引用も交えて使節団のイギリス像が改めて論じられており、全体の結論部としての自然なまとまりがあたえられる。

著者はこれまでヴィクトリア朝イギリスの文学を中心に幅広い分野で多くの業績を残しているが、そのなかでも1851年ロンドン万博についての著書はおそらくもっとも多く読者を得ているもののひとつであろう。いうまでもなく1851年と1862年に開催されたロンドン万国博覧会は、19世紀なかばのイギリスの絶大な産業・技術力の象徴であり（その後、同趣旨の万国博覧会は今日にいたるまでイギリスでは開催されていない）本書でもヴィクトリアン・インパクト（副題）の中心的イメージをあたえられている。徳川遣欧使

節団が開会式場で「七人のサムライ」として参加し展示品をつぶさに観察した1862年万博はもちろんのこと、1851年万博の存在感は、両使節団が仰ぎ見たシデナムのクリスタル・パレスの偉容だけでなく（本書では岩倉使節団による水晶宮訪問が取り上げられているが、福沢も万博会場の観客となつてほぼ十日後、ヴィクトリア女王の誕生日の5月27日にシデナムの「玻璃宮」を訪れ、宮内外の様相とその賑わいを記している）、イギリス国内で彼らが賛嘆することになる産業技術に投影されており、生きている過去としての意識を強く覚醒させられたことだろう。

その意味では、岩倉使節団のイギリスでの公式の活動が、1872年8月19日（旧暦7月16日）の外務大臣（「外務宰相」）グランヴィルの訪問から始まっている点に注目したい。本書でも少しく触れられているように、この第二代グランヴィル伯爵（Granville George Leveson-Gower, 1815-1891）は、1851年のロンドン万国博覧会王立委員会（Royal Commission）の中心的メンバーであった。同委員会の副委員長としてアルバート公を輔佐したばかりでなく、傘下の11の小委員会のうち8つで基軸的役割をはたしており、アルバート公やヘンリー・コールとならび1851年万博の立役者であったと言ってよい。この日使節団首脳たちは昼間にグランヴィル宅を訪問して使節の使命を告げたあと、午後にサウス・ケンジントン博物館（現ヴィクトリア&アルバート博物館）を視察し、夕方には再びグランヴィルから夕食の招待を受けている。本書後編最終章では、イギリスやヨーロッパに絶大な繁栄をもたらした「僅二四十年ニスキサル」短期間での急成長に感嘆する『実記』の記述が引用されているが、原文では、この訪問日の記述として挿入されている。おそらく、二つの万国博と密接に関係した博物館の展示物を見たあと、晚餐会でグランヴィルから過ぎし万国博覧会の詳細について話があり、そのことがのちの歴史学者久米をおおいに刺戟してこのような『実記』の記述に結実したに違いない。なお使節団は翌年のヨーロッパ大陸諸国来訪のおり、ウィーンで開催された万国博（良く知られているように明治政府が公式に出品した最初の万博となった）を視察し、『実記』第五編の第八十二および八十三巻に「万国博覧会見聞ノ記」として綴られている。ここでの各国の展示品にかんする簡にして要を得た解説は、博覧会から情報を汲み取るにあたっての久米のすでに熟達した観察眼が感じられる。

久米による『実記』については、本書で底本とされている岩波文庫版の「解説」を記した田中彰も、ヨーロッパ科学技術摂取の歴史のなかでもっと注目されるべき文献と指摘しているが、著者も日本から発信すべきヴィクトリア朝研究のためにも絶好のテキストになりえることを強調している（296頁）。評者もまたあらためて『実記』に目を通し、同じ思いを強くした。そういったことも含めて、本書はまた、分野を問わず19世紀イギリス史や日英交流史に関心を持つ読者の研究意欲を広く刺戟するにちがいない。ふんだんに収録された図版類が本書の魅力をいっそう高めている。